

Title	「存在の彼方へ」における受動性
Author(s)	西田, 充穂
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 40 P.17-P.34
Issue Date	2006-12
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/3643
DOI	
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『存在の彼方へ』における受動性

西田 充穂

はじめに

レヴィナスは感性的なもののあり方に固有の意義が認められることを様々な仕方で主張する。ここでいう感性的なものとは、主体が何らかの刺激を受容する感覚器官としてあることではない。感覚器官を具えた主体の働きたる認識や知覚に先立ってそれらを条件付ける次元の謂いである。レヴィナスはこの感性の次元を受動性と規定し、ここから存在論に先行する倫理的な主体の編成を説く。

その受動性は、『存在の彼方へ』¹⁾で繰り返される表現、「あらゆる受動性よりも受動的な受動性」として示される。これは能動-受動といった対の成立よりも手前に位置づけられる感性的なものの次元のあり方であり、受動性は1) 言語、2) 時間、3) 感性的経験の文脈で論じられる。それらは主体が受動性からなるという意味では同じ型を有するもの、主体が根源的に受動であることを示すものとして提示される²⁾。この主体の受動というあり方から、それぞれの文脈で主体を受動としてあらしめる他者が導かれる。このような議論が展開される感性的なものの次元が受動であることを示す議論の中で、レヴィナスは否定辞を具えた術語を多く用いる。本稿では、この点に注目して、レヴィナスの論じる受動性について検討する。

1 存在の同一性への否定と感性的なものにおける否定

レヴィナスの議論では、感性的なものこそが根源的である。そのために、表象批判、主知主義批判が多くなされるのであるが、その批判は単にそれらを拒否するものではない。理性や知性は感性的なものから展開されるのであり、感性的なものとは「地続き」³⁾である。それゆえ、一切の経験を表象や知性へと集約する理論に対して、それらが第一位にあるのではなく、感性的なものこそがそれらを条件付けていること、つまり、感性的なものへの先行性が説かれるのである。

では感性的なものはどのように論じられるのか。レヴィナスは感性的経験を極めて具体的な経験として提示する。そのため、レヴィナスの議論は日常的な出来事との親和性が高いのであるが、一連の議論は感性的なものを再考し、その先行的な意義を認めることにある。そのため、「極めて具体的な経験」とは、感性的なものが極限であることを示すものであり、受動性の強調はその極限を表すものである。これは問題の受動性が、対となるあり方への否定を介して、作用-反作用の対の一端を示すもの、能動-受動の対の一端をなすものではないという点に関わっている。作用-反作用、能動-受動といった対は互いに否定的な関係にあるが、それは同一の次元に属する運動でしかない。そうではなく、受動性が作用や能動の否定とは異なる次元にあること、受動性が根源的であることを主張するため、レヴィナスは幾通りもの仕方で感性的なもののあり方を論じるのである。相互に否定される関係にあるものは存在の同一性の次元で展開される運動にすぎない。感性的なものへの受動性が存在の同一性に先行することを示すべく、レヴィナスは繰り返しそれがいかなるものではないのかを述べる。このために、否定が極めて積極的に利用される。というのも、否定は批判対象である存在の同一性へと向けられているからである。感性的なものへの

受動性は、この否定を起点に論じられる。それゆえ、感性的なものの受動経験が様々な仕方で提示される『存在の彼方へ』では、否定辞を具えた種々の術語が見られるのである。

否定されるのは存在の同一性である。しかし、この否定は「～がない」の謂いではない。レヴィナスは否定について次のように述べている。「あらゆる否定的な属性は存在することの彼方を言い表すのであり、責任—応答可能性において積極的なものとなる」(AE26)。否定が積極的な意義を有するのは、それが感性的なものの次元で固有な意味が生じる契機となっているからである。先の引用に続くパラグラフでは「責任—応答可能性」の積極的な意味が述べられる。それによると、その意味とは「存在することを超えて、無限なるものを翻訳することであり、様々な関係や原理を覆し、存在の中にあることを覆す」(ibid.) ことにある。したがって、存在の同一性への否定によって言われているのは、存在の同一性を脱するということである。それゆえ、レヴィナスの否定辞の多用にも、単に肯定の打ち消しではなく、それ自体で積極的な意味のあることが認められる。

このような否定を経ることで、レヴィナスは「無限なるものによって超えられる存在することの破綻する点」(AE27)として主体性を考察する。そこで検討されるのは主体のあり方であるが、主体はもはや存在の次元ではなく、感性的なものの次元にある。というのも、存在の同一性が否定されても、否定されずに残されるのが感性的なものであり、感性的なものの存在への先行性はこのような仕方で明らかにされるためである。レヴィナスはこの感性的なものの次元において、起源へ遡行するという仕方で主体の根源的なあり方を追究する。したがって、感性的なもののあり方、つまり、受動性を示すために用いられる否定辞は、感性的なものの先行性を、その受動性の極端さや極限性を標しているのである。存在か非存在かの二者択一に陥る思考はいずれせよ存在の次元での議論でしかないものとして

既に退けられている。存在に先行する次元での受動性からいわゆる能動—受動の関係が、その成り立ちまでもが導かれるのであるから、受動が主体の根源的なあり方なのである。そのため、この受動性にはもはや否定されるとの意味では極限がない。つまり、強調される受動性は、存在の次元での運動のように、否定によっては能動性へと反転することがないのである。したがって、受動性とは、その否定がもはや不可能な次元、否定によっては尽きることのないあり方である。

レヴィナスはこのような受動を論じるために、否定によって存在の同一性と感性的なものとを画すのであり、存在の同一性への否定は、おおよそ一般的な意味で理解される議論を覆す支点である。そして、以下に見るように、感性的なものの次元における受動性を規定する多くの術語が否定辞を具えている。その否定辞は存在への先行性を意味するだけでなく、極限としての受動性、ならびに、もはやその否定がないという意味での不可能性を同時に示している。

ここでは否定という点に注目したのであるが、否定は議論の転回点である。なぜなら、レヴィナスは否定を折り目に、主体が倫理的であることを明らかにしてゆくからである。一つ目の転回は存在の同一性への否定である。これにより、存在に先行する感性的なものの次元が明らかにされる。二つ目は、感性的なものの次元での否定の不可能性という否定である。いずれの否定も主体が受動であることを示す議論の転回点であるが、後者の否定からは、それが示す極限を超えて、その起源ではないにせよ、ぶつからざるをえないという仕方でのみ出される何ものか——他者が見出される。これが受動性を倫理的なあり方にする、言い換えると、受動性に倫理的な意味を負わせていると考えられる。したがって、前者の否定は主体が受動であること、後者の否定はその主体が倫理的であることを導く転回点である。

2 言語の受動性と他者

レヴィナスは倫理的主体には主体の個別性が不可欠であると考えている。主体の個別性も感性的なものから導かれるのであるが、この過程では前提として肯定されるものの「なさ」という意味での否定を経ることはない。また、感性的なものへの否定はもはやありえないのであった。そこで、レヴィナスは感性的なものの次元で、受動性や感性的なものへの否定ではなく、受動性をさらに遡ることによって、「受動性の受動性」というあり方で主体が個であることを明らかにして行く。つまり、受動性を遡行することによって、感性的なものの次元ではもはや不可能とされる否定を免れるのである。

この議論からは、主体が個体であるだけでなく、主体がそれぞれに唯一で、倫理的であることが導かれる。レヴィナスは初期の著作『実存から実存者へ』(1947)でも、主体を文法概念を用いて契約や義務の関係にあるものとして考察し、主体が倫理的であることを論じていた。言語の文脈でなされる主体の考察は、主体を一挙に倫理的主体——責任を負う主体にする議論になっている。ここでの主体は契約や義務の担い手であるが、なぜかしら自らに課せられるものは回避不可能であり、いつしか結ばれていた契約は解約不可能であり、こうした義務を果たすべき主体は代替不可能であることが指摘される。主体の規定に関わる諸々の不可能性は受動性の証しである。というも、レヴィナスの議論では、主体はこれらの不可能性を負荷されるという仕方、不可避免的に出来させられたことになっているからである。

このように言語という観点から主体を考察する議論は『存在の彼方へ』でも踏襲されるが、そこには「言うこと le Dire」と「言われたこと le Dit」の区分が導入され、主体はその枠組みのもとで改めて考察される。それ

によると、言語の働きはこれをあれとして同定し、命名することにある (AE 63)。こうした同一化の働きは現在における「言われたこと」にある。一方、「言うこと」は言語の根底に見出される受動性として規定され (AE 30)、「感性的なものにおける第一の〈能動性〉」とも言われる (AE 101)。そして、現在において言語が「言われたこと」として働くのは、それに先立つ「言うこと」による。この言語の文脈で、「言うこと」は「言われたこと」に反するという考え方は採られていない。「言うこと」と「言われたこと」はいわゆる肯定と否定との関係にはない。ここに、存在の同一性を退け、感性的なものの先行性を提示するという先の議論の型が認められる。

それでは「言うこと」が受動性であることは、どのようにして明らかにされるのか。これは「言うこと」における主体が対格であることから論じられる。対格は「類い稀なる意味作用」をもつ「特異な代名詞」であり、「対格はいかなる主格からも派生せず、自己喪失によって自己を再び見だすという事実そのものである」(AE 26)。しかし、主体の議論は対格から始められるのではなく、対格は主体を名詞・主格以前へと遡ることによって捉えられる (AE 167, 177)。この主格から対格への遡行を果たしているのが「言うこと」である。「言うこと」と「言われたこと」に相関する対格について、レヴィナスは次のように述べている。

「再帰代名詞 *se* とその意味する再帰によってある問題が立てられる。再帰代名詞とその意味する再帰は「言われたこと」からだけでは理解されない。この特異な代名詞が動詞と結びつき、「言われたこと」において受動形を与えるべく用いられたとき、この特異な代名詞の根源的な対格は、ほぼ不可視なものとなる。存在することにおける能動性と受動性という理解の彼方、あるいは、手前へ、「言われた

こと」の彼方、あるいは、手前での、ロゴスの彼方へと、そして、存在することと存在者の両義性の彼方ないし手前へ、その代名詞の意味を遡らねばならない。「還元」はこの遡行において果たされる。還元はある積極的な位相を含んでいる。それは「言われたこと」という主題化の手前での「言うこと」の固有の意味を示すものである。(AE 74, cf. AE 31)

「言われたこと」においては、対格のあり方は不明である。しかし、それに先行する「言うこと」において、対格は受動性が強調される主体の根源的なあり方、「いかなる忍耐よりも受動的な受動性」(*ibid.*)を示す (cf. AE 195)。

対格が根源的であることは、対格の不変性 (*indéclinabilité*, 不変的な対格 *se indéclinable*) によって表される (cf. AE 148, 169)。ここに織り込まれた不可能性は対格の受動性とその根源性を表しており、受動性としての主体が代理 (*substitution*) や人質 (*otage*) であるという議論へと連なる。これは、代わりとなる何ものかなしには成り立たない主体のあり方を示す議論であり、代わりとしてあらざるをえないということに主体の主体性が置かれる。したがって、主体はそれ自身では直接的な仕方で自らの同一性を保証されておらず、自らに根拠を有していない。これは「いかなる受動性よりも受動的な受動性」というあり方の一つである。

そして、主体がその代わりとなる何ものかこそ、「言うこと」を検討する言語の文脈から導かれる他者である。「言うこと」の先行性には、主体に対する他者の先行性が控えていたのである。というのも、「言うこと」は「言われたこと」に先行する次元というだけでなく、そこでは不可避な仕方で「言わされる」というあり方でも受動になっているからである。これは「言うことに」おける主体が「～に応じる」ものとして、責任・応答

可能性として何かを言わされる主体のあり方である。そして、否応なく「言わされる」という側面には、「言う」ことと不可分な言われる何かだけでなく、この何かを誰かに言うということが含まれている。ここに「言うこと」から明かされる他者がある。つまり、「言うこと」が不可避なあり方を示す受動性として何かを「言わされる」からには、「言うべき」何かを伝える誰かは既にいるという議論である。しかし、この誰かを「言うこと」と「言われたこと」との相関から導くことはできない。このような導出が不可能であるということから、その相関を超えて「言うこと」を否応無しに強いているものが見出されるのである。したがって、「言うこと」から導かれる他者は、「言うこと」と「言われたこと」を超えたところに位置していることになる。

2 時間の受動性と他者

以上で確認したように、レヴィナスは主体が感性的なものの次元に成り立つことについて、受動性の遡行という仕方でのその起源を追究する。しかし、受動性の起源へと遡り、「いかなる受動性よりも受動的な受動性」として受動性の度合いを強め、受動性の特異さを強調しようとも、受動性が受動性である限り、「～を被る」という受動のあり方の果てに、受動であることを超えて、「～」を与える何ものかが残される⁴⁾。しかし、感性的なものには否定がなく、受動性には極限がないのであった。そのため、レヴィナスはこの何ものかを感性的なものの起源とはせず、その極限を超えるものをそもそも起源としては見出せないものとして捉え返す。ここで、受動性の極限に認められる不可能性は、追究される起源であり、これが「無-起源 (non-originel)」、「非-起源 (無-秩序 an-archique)」として否定辞を用いて示される。

こうして不可能とされる起源への遡及もまた感性的なものの次元でなさ

れる受動性の追究である。レヴィナスはこの文脈で「隔時性 (dia-chronie)」と称する時間を提示する。これは、「共時性 (synchronie)」と称される時間とは異なる時間とされる。共時性とは、一般的な意味で理解される時間であり、現在に現れ、現在を起点に同一化の働きをなす時間である。一方の隔時性は、共時性の同一化の時間によっては捉えることのできない時間とされる。このため、隔時性は同一化の作用に反する時間 (contre-temps, anachronism) であり、共時性に先行する時間である。隔時性が示す時間は、現在に現れることがないだけでなく、現れたこともないという意味で過去であったこともないような時間である。

この共時性と隔時性との関係も、存在の同一性と感性的なもの、「言われたこと」と「言うこと」と同型である。したがって、この時間の文脈でも「なさ」ではなく、批判の意味で否定されるのは、共時性と規定される現在、現在に集約される時間である。共時性は現在において存在の同一性と結びつく。そのため、現在が否定的に論じられる一方で、過去のあり方に重点が置かれる⁵⁾。

ここで否定辞を具えているのは、過去を規定する術語であり、それによって次のような不可能性が指摘される。現在に現れないという意味では、過去の不可視性が、当の過去が過去であったこともないということからは、現在との共約不可能性や現在への回収不可能性が、こうして、現在との接点をもたないということからは、過去の記憶不可能性が言われる。しかし、ここで積極的に主張されているのは、起源への遡行という方向性である。逆説的とも言える仕方での過去の強調は、現在に集約される時間の流れに逆らうという意味で共時性の時間を逆転させる。過去を偏重する隔時性は、時間の秩序を攪乱させる考察である。

過去への遡行が言われながらも、隔時性において追究される時間の起源・始源への到達はそもそも不可能である。これは、時間の考察が現在への

否定を機に共時性から隔時性へと向かうためである。退けられる現在から遡り、特異な過去へと逆転した時間のあり方を示すという点で隔時性は受動性の次元である。この隔時性において受動性は起源への遡及として追究される。しかし、受動性の極限への到達は不可能であると否定されているのであった。遡行の達成、起源への到達は不可能性によって予め封じられている。それゆえ、隔時性においてもその起源への遡行を果たすことは不可能になっているのである。時間の文脈で指摘される無一起源や非一起源、あるいは、無一秩序に具わる否定辞は、時間の起源への到達が不可能であることを示している。不可能を表すこれらの否定辞は、「言うこと」に見られたのと同様、先行性と受動性の徴でもあり、隔時性が共時性に先行する時間、受動性としての時間であることが理解される。

ところで、隔時性における起源への到達の不可能は、過去への遡行に一定の歯止めを掛ける。そこで起源への遡行を阻むものとして見出されるのが時間の文脈での他者である。不可能性は存在の同一性に先立つ感性的なものの果てに見出されるが、確認してきたように、感性的なものは果てることがない。そのため、不可能性を示すものとしての他者はその極限を超えている。このような他者の導出は、言語の文脈で「言うこと」の示す受動性を超えて他者を見出すのと同型の議論である。

時間の文脈での他者は、つねに、不可避的に「遅れ」を孕んだものとして現在にあらわれる主体のあり方から論じられる⁶⁾。この文脈で否定的に扱われるのは共時性であった。現在へと向けられる否定は、主体の現れが現在であるにも関わらず、その現れが当の現在に遅れているという現在へのずれから示される。同時的であることを旨とする現在で、当の現在に遅れが孕まれているというのである。同時にあること、つまり、現在であることには、既に同一ならざるずれが孕まれる。

このずれは隔時性に由来する。同時であることに孕まれるずれは、隔時性と共時性との関わりのあらわれである。隔時性が共時性にずれをもたらす。これによって、自発性という考え方が退けられる。というのも、レヴィナスは自発性を能動性と受動性との同時性と解しており（AE59）、主体における同時性を退けることで、主体の自発性を問いに付し、自己触発という考え方を退けるからである。時間の根源たる隔時性は既に与えられてしまっている。これがレヴィナスのいうところの異他触発である。異他触発という仕方で主体に隔時性をもたらしているのが時間の文脈で見出される他者である。他者は隔時性の起源とも考えられるが、起源を捉えることは不可能であった。したがって、他者は隔時性の無一起源や非一起源として、隔時性を超えている。一方、主体は隔時性の起源という点では不可能性に突き当たるのであった。この不可能性から転じて、既に隔時性を与えられているという点で、主体は受動である。

以上で、言語と時間の文脈で示される受動性を見たのであるが、感性的なものは存在の同一性への否定として見出されるのであり、いずれの場合もまずその否定が感性的なものへの転回点となっている。ついで、感性的なものの次元でその起源が追究される。しかし、それには際限がなく、起源への不可能性という仕方で再度否定に突き当たる。したがって、感性的なものに求められる受動性は二つに否定のはざまにある。

ところで、否定、Aに対して非Aを言うにはまず、件のAが前提されていなければならない。Aと非Aにおいて一体どちらが受動性を示すのかといえば、否定によって示される非Aである。というのも、否定されるのはAであるが、レヴィナスの議論で退けるべきは存在の同一性であり、これがAに相当するからである。Aと非Aは存在の次元とそれに先行する次元となり、この対が「言われたこと」と「言うこと」、「共時性」と「隔時性」

の対である。そして、非Aに相当する後者、「言うこと」「隔時性」によって受動性が示されるのである。

こうして否定を経て捉えられた受動性が、否定辞を用いて規定される。これは「いかなる受動性よりも受動的な受動性」として強調される受動性であり、「言うこと」と「隔時性」の次元の極限性を示す。このため、主体の受動性においてその起源が追究されるが、感性的なものの起源への遡及は果てることがなく、起源や始原に到達する遡及は不可能である。レヴィナスはこの起源を巡る不可能性を折り目に、受動性において辿られる方向性を再度反転させる。この反転は、件の不可能性にある「～できない」を「～してはならない」という否定命令、禁止に読み替える転換点になっており、責任・応答可能性の議論はここを始点に展開される。また、「～してはならない」には、同時に「～すべきである」が含まれている。これらはいずれも義務であるが、同一者としての主体において成り立つのではなく、主体の受動性を超えて見出された他者からの命令として導かれる。それゆえ、レヴィナスにおける義務は自律ではなく、他者との関係を前提とした、他者から課される他律である。この点においても、主体は受動である。

3 感性的経験における受動性と他者

言語と時間の文脈は、受動性の極限での不可能性から他者を導く議論であった。しかし、レヴィナスは主体の受動性を示しつつ、他者をもう一つ別の仕方でも導出していると考えられる。それが以下に見る感性的経験を論じる文脈である。感性的経験は他者との接触において受動性を考察する文脈であるが、これは上に見た言語と時間の議論以上に様々な仕方でも論じられている。『存在の彼方へ』では、主体の受動性を示す受苦 (patir) の経験として、快と対をなすことのない、苦痛 (douleur)、苦悩 (souffrance)、

強迫 (obsession)、迫害 (persécution) といった経験が考察されるが、ここでは、「被可傷性 *vulnérabilité*」というあり方に注目する。というのも、感性的なものには、快と苦を極とする感性的経験が考えられるが⁷⁾、『存在の彼方へ』においては、被可傷性を中心に、もっぱら苦の経験が考察されるためである。

さて、この被可傷性もまた主体の受動性を示すものである。そのため、傷つくか、傷つかないかという二者択一による一方の可能性ではなく、傷つかないことはないとの意味で、不可避的に、一方的に傷つけられるの謂いである。このようなあり方を示す点で、被可傷性は「言うこと」や「隔時性」と同様に感性的なものの次元を示している。さらに、否応無しに負わされる「傷 *blessure*」はそれを被ったときもわからない「外傷 *traumatism*」である。傷や外傷は、主体のうちに刻まれるという点では主体とは異なるものの印のようであるが、「出血 *hémorragie, saigner*」とも言っている。これは自らをかたちづくるものが自らの外部へと流れ出すことである。それも、自らとは異なるものと接することによって、つまり、傷を負わされることによって⁸⁾。それゆえ、被可傷性を中心とした表現が意味しているのは、苦の極としての主体の開口部、開けである。受動というあり方からなる主体は自己完結する閉域ではありえず、自己の成立に先立って、なんらかの仕方で他者からのはたらきを被っている。これを不可能性という否定を超えて明らかにするのが、言語や時間の議論である。

ところが、被可傷性も存在の同一性に先行する次元での議論でありながら、ここでは否定を超えることなしに他者との関係が述べられる。このため、被可傷性についての議論には、否定辞を具えた術語がみられない。つまり、被可傷性では、不可能性を超えることなく直接的な仕方で異他なるものと接することが示されるのである。直接的な接触という点では、感性的経験を論じるもう一方の極である享受も同じ構造をなしている。享受と

被可傷性はいずれも、既に感性的なものの次元にあり、この意味で両者は「言うこと」や隔時性と同様に、存在の同一性に先行する次元にある。したがって、被可傷性と享受の対は、「言うこと」と「言われたこと」、隔時性と共時性からなる対関係とは異なる (cf. AE 104)。こればかりでなく、被可傷性と享受が「言うこと」や隔時性とも異なるのは、それらが他なるもの・他者と直に接することで、同一者が成り立つという点にある⁹⁾。享受や被可傷性が示す感性的経験とは、他なるもの・他者との接触の直接性である。したがって、そこでは受動性の極限での不可能性という否定を超えることなしに他者や他なるものとの関係が示されているのである。

両者の差異は同一者となる主体が接している異他的なもの——他なるもの・他者との関係の違いに由来する。食物摂取に擬される享受では、他なるものの同化から同一者としての主体の成立が述べられる。一方、被可傷性では、同一者と接している他者が同化されることはない。受動性として、他なるものではなく、他者との直接的な接触が言われるのは、被可傷性によってである。被可傷性は、他者を同一者の同一性へと組み込むのではなく、同一者の中に他者を懐胎する母性として論じられる (AE 121)。

被可傷性は「感性的なものの意味」を遡ることで母性へと到る (AE 114)。母性が「被可傷性の究極の意味」(AE 170)であり、ここに感性的経験における「いかなる受動性よりも受動的な受動性」が示される。子どもを懐胎する様である母性は、他者を抱え込んでいるというあり方に同一者としてある。懐胎される他者との関係である母性が示すのも受動性の極限である。しかし、ここでの受動のあり方には、「言うこと」や隔時性でのそれとは異なり、不可能性としての否定を超えるという型が見られず、この意味で直接的な仕方では他者との関係がある。では母性を受動にしていると考えられる他者はどこに見出されるのか。母性は被可傷性の検討から導かれ

たのであり、そこに見出されるのは傷をつける他者である。そして、母性において指摘できる他者といえば、既に先ほどから述べているように、同一者の内なる他者、懐胎されている子どもということになるだろう。しかし、『存在の彼方へ』の時点でも『全体性と無限』で示された父-子関係を敷衍しうるのであれば、懐胎された子どもだけでなく、当の子どもの懐胎と産出に関わる父となるものも内なる他者へと連なる他者である¹⁰⁾。この場合、同一者の内なる他者は二重化されていることになるだろう。

いずれにせよ、被可傷性、または、母性が示すのは、他者との根源的な関係であり、これは胎内に子どもがいるというあり方にかかっていると解される。すると、母性は「〈同一者〉における〈他者〉」という関係であるのだから、これが他者との直接的かつ根源的な関係、つまり、〈同一者〉=母と〈他者〉=子どもによる他者との関係の根源的なあり方を示していると考えれば、この母-子ども関係には、複数の関係軸が入り組んでいることが伺える。まず、母と子どもの間での大人-子どもの関係軸がある。加えて、レヴィナスの議論では子どもは男児であり、母と子どもの間には女性-男性の関係軸を見ることもできる¹¹⁾。他者との関係についてのこのような規定は、時間や言語の文脈からは取り出すことのできないものである。したがって、この感性的経験の文脈は、他者を導くという点で先の二つの文脈とは異なると解されるのである。

むすび

レヴィナスは受動性からなる主体を言語、時間、感性的経験の三つの文脈から提示する。それらは独立した議論ではなく、存在の同一性への批判として、主体の受動性が先立つことを明らかにするという点で互いに連繫している。また、そこで「いかなる受動性よりも受動的な受動性」として強調される受動性の起源を辿り、それが他者との関係であることを明らか

にするという点でも同型である。

しかし、それぞれの文脈での術語には、否定辞の使用の有無という区別が見られる。これは主体において受動性を辿り、それを超える他者を明らかにする際に、不可能性としての否定を超えるか否かの差異に通じている。不可能性を超えて示される受動と不可能性を超えることなしに示される受動の違いである。これは否定辞の介入の有無に応じて、間接的な受動と直接的な受動とでも言えよう。前者は言語と時間の、後者は感性的経験の文脈に割り振られる。この二つの違いは、受動性の極限での否定の無さと他者の位置取りにあらわれる。前者での他者は、主体の感性的なものを超えたところに認められる。この意味で他者は主体の外部に認められるが、後者における他者は、他者は主体の外部とも内部とも分かちがたいところに、あるいは、外部とも内部とも言えるところに認められる。後者での他者の所在の定まらなさは、母性における他者が受動性の極限たる被可傷性を超えたところにはない、ということだけではないようである。被可傷性における受動性と他者については、さらなる検討の余地が残されている。

注

- 1) Emmanuel Lévinas, *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence* (Martinus Nijhoff, 1978) Kluwer Academic 引用、指示に際しては略号 AE とページ数を記載。
- 2) 山形頼洋「現象学の形而上学化と他者の問題」、現象学年報18、2002年、日本現象学会編
- 3) 冠木敦子「レヴィナスの倫理における身体的主体——その予備的考察」、『法学研究』（慶応義塾大学法学研究会）、76巻12号（2003）、343-360
- 4) それと同時に、依然として「受動であること」も残される。この点については、後に言及する。
- 5) 過去の偏重は後期レヴィナスの特徴である。現在を否定的に論じるという点では『全体性と無限』（1961）も同様であるが、そこから転じて重点が置かれ、否定辞を用いて主題的に論じられるのは未来である。

- 6) この現在における遅れとずれの議論も既に『実存から実存者へ』(1948)に見られる。
- 7) 苦の極にある被可傷性に対し、快の極には「享受 (jouir, jouissance)」がある。しかし、この対は正確には快と苦の極ではなく、自我極の凝縮と核分裂をめぐってのものである。
- 8) 傷は自傷でも他傷でもありうるが、傷を受けることにおいて受動性を取り出す点が重要である。その意味で、自傷・他傷の別に関わりなく、他から被る傷、あるいは、他から被ることが傷だと解するのが妥当だろう。
- 9) *autrui (s)/Autrui (s)* は一様に「他人」との訳語をあてられるが、*autre (s)/Autre (s)* は、文脈に応じて「他なるもの」とも「他者」とも訳出する。享受では、おおよそ事物としての他との関係が論じられるのに対し、被可傷性においてはもっぱら人としての他との関係が論じられるため、*autre (s)/Autre (s)* は享受では「他なるもの」、被可傷性では「他者」と訳出した。
- 10) 『全体性と無限』第四部参照。『存在の彼方へ』では子どもの懐胎が述べられるばかりであり、産出の議論については明らかではない。子どもの産出については『全体性と無限』で論じられるが、そこで子どもを産出するのは母ではなく、父である。
- 11) このため、Thonéのように、母-子ども関係や父-子ども関係を「(両)親-子ども関係」と解すると、レヴィナスにおける性差の問題——性差は女性によって示される——を捉えそこなうように思われる。Astrid Thoné, "A radical gift. Ethics and motherhood in Emmanuel Levinas' *Otherwise than Being*", in *The British Society for Phenomenology*, vol. 29, No. 2, May 1998.

(大学院博士後期課程)

SUMMARY

La passivité dans *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*

Mitsuho NISHIDA

Dans *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, Lévinas nous montre, de diverses manières, ce qu'il y a de plus propre dans le sensible, et précise la dimension du sensible qui précède celle du être comme «passivité plus passive que toute passivité». C'est en effet dans cette dimension profonde ainsi dégagée que devient perceptible la formation du sujet éthique qui précède l'ontologie.

La passivité en question concerne trois aspects : a) le langage, b) le temps, et c) l'expérience sensible, auxquels correspondent les trois conceptions lévinassiennes suivantes : a') le Dire, b') la dia-chronie, et c') la vulnérabilité. Toutes les trois partagent une même texture en ce que la passivité originelle y participe également comme moment essentiel. C'est à travers elles que se manifeste 'l'autre' ; plus précisément, c'est au sein d'une sorte d'impouvoir—à laquelle la recherche de l'origine de la passivité dans le sensible aboutit—qu'émerge l'autrui. Ce dernier seul révèle le sujet éthique dans sa passivité absolue. Toutes ces idées se rattachent à la critique lévinassienne contre "le même d'être".

Au fil de cette argumentation se rencontrent nombre de négations et de termes négatifs, dont l'usage levinassien nous semble remarquable. Nous nous proposons donc d'examiner la passivité lévinassienne, en analysant cet usage qui permet de clarifier l'idée que Lévinas se fait du négatif. Il est alors possible d'introduire une distinction importante entre les trois domaines ci-dessus : le langage, le temps et l'expérience sensible. D'une part, l'on trouve "l'autre" au-delà de la passivité, quand il est question des deux premiers. D'autre part, dans le dernier, "l'autre" se trouve là où l'on n'est plus capable de discerner en la passivité l'intérieur d'avec l'extérieur.

キーワード：感性的なもの、受動性、否定、否定辞